

〈修士論文発表会〉

1, 明治時代後期における西洋音楽普及への取り組み

——前田久八の活動を中心に——

高濱 絵里子（東京大学大学院）

【発表要旨】

本研究は、明治時代後期に活躍した音楽家、前田久八（1874～1943）の活動と、彼が日本の洋楽受容に果たした役割を明らかにしようと試みたものである。

前田久八は明治43年に博文館より、婦人・女学生を主な読者対象とした「家庭百科全書」のうちの一編として、『洋楽手引』を出版している。同書には音楽史の概略的内容から、楽典、声楽や器楽の様々な曲種や楽器についての解説、さらにはオルガン、ピアノ、ヴァイオリンという当時の教育に直結する器楽と声楽の練習方法が詳細にわかりやすく記されていた。一般向けの啓蒙書の性格を優に越えた内容に発表者は大きな関心を持ったが、この書に関する先行研究はなく、著者の前田久八に関する先行研究も一件のみという状況であった。なぜこれまで前田に焦点が当てられることが殆どなかったのかという疑問を抱き、教育、演奏、創作の各分野で洋楽受容に関わった前田久八の活動を明らかにすることによって、日本の洋楽受容史の研究に対して少なからず貢献できる部分があるのではないかと思ったことが、本研究の動機である。

研究は、前田久八及び東京音楽学校に関連する新聞記事、文献、記録資料等の調査、そして前田が残した出版物及び創作作品については同時代の他の出版物や創作作品との比較を交えながら確認及び分析を進め、明治時代後期に前田が音楽家としてどのように洋楽受容に関わっていたかを検証した。

前田及び東京音楽学校に関連する資料調査からは、前田が同時代を代表する音楽家であったことを実証した。また、前田のキャリアの出発点を確認することによって、「音楽を才能ある一部特殊の人のものでなく誰にでも親しめるもの」として普及に努めた、前田の専門教育を越えた洋楽啓蒙活動の原点も見出した。

出版物の確認からは、前田が西洋音楽について広汎で豊富な知識を習得していたことだけでなく、西洋音楽が一つの学問であり芸術であることや、音楽における聴覚の重要性をよく理解した上で、西洋音楽を広く普及しようとしていたことを明らかにした。

創作作品では《新曲 残夢》（杉谷代水作詞、明治39年）に特に焦点を当て、1900年代の日本のオペラ受容状況や日本語による音楽劇の創作状況を確認した上で詳細な分析を行い、音楽自体に用いられた和声進行や終止形、転調といった「音楽語法」や、間奏による場面転換といった音楽構成から、同時代に創作された北村季晴、小松耕輔、東儀鐵笛らの音楽劇作品よりも、はるかに西洋の「オペラ」に近い作品であったことを確認した。この作品の歴史

的意義を初めて明らかにできたことは、本研究の大きな成果であったと考える。

以上の結果から、前田久八の音楽家としての活動の全体像をおおよそ明らかにし、これまで注目されることのなかった前田の主な業績を掘り起こすことによって、彼が洋楽受容に果たした役割を示すことができたと言えよう。

2. 20 世紀初頭における清国留学生・曾志忞の音楽思想と実践

郭 君宇（東京藝術大学）

【発表要旨】

本研究の目的は、曾志忞(1879～1927)の音楽思想と実践を対象に、これまであまり検討されていない曾の日本と中国での音楽活動の連続性を明らかにすることである。曾は上海の篤志家の家庭に生まれ、1901 年に来日し、1903 年東京音楽学校に入学し、1904 年に「亜雅音楽会」を創設すると同時に、日本で幅広い音楽活動を始めた。日本の音楽教育に影響を受けた曾は、1908 年に帰国後、中国近代初の西洋管弦楽団「上海貧児院音楽隊」を結成し、洋楽の導入を目指す「中西音楽会」をも設立した。

本論では、先行研究の欠を補う形で、日中両国に散在する史料を利用し、とくに上海貧児院に関する一次資料を収集した上で、曾が日本で行った音楽活動が如何に帰国後の音楽活動に影響をもたらしたのかを研究し、その音楽活動の連続性を捉えることによって、より立体的・連続的な曾の人物像を描き出す。さらに、曾志忞を通じて、日本が中国における西洋音楽の受容及び音楽教育に与えた影響を解明し、中国近現代音楽史の新たな課題を明らかにした。本論文は以下のように構成される。

第一章は、曾の生い立ちと前半生における音楽思想の形成過程を把握した。また、曾が日本留学中に受けた音楽教育の状況及び明治時代の日本における音楽の発展が曾に与えた影響に着目し、鈴木米次郎・ケーベルとの師弟関係を中心に、日中両国における西洋音楽の受容について明らかにした。

第二章は、当時の留学生・曾が、学校に通う以外に、集会場であった清国留学生会館で、音楽に関する文章や教科書を翻訳して発表したり、音楽講習会を行ったりしたことについてふれた。その中で、亜雅音楽会は 20 世紀初期の東京音楽界で一定の位置を占めており、その卒業生も音楽教育の普及を通して中国の音楽界において重要な役割を果たしたことが窺えた。

第三章は、上海の現状を軸に、曾の日本での活動が帰国後の活動に及ぼした影響について分析した。曾は日本にいる間、音楽を学びながら多くの福祉施設を訪れた。なかでも石井十次の岡山孤児院は、内部の管理制度だけでなく、音楽隊を発展させていたことでも曾の貧児院に大きな影響を与えた。本章は岡山孤児院及び上海貧児院の双方に関する報告、新聞記事などを中心に調査し、上海貧児院に見られる日本的要素を明らかにした。

第四章は、曾が 1908 年に設立した上海貧児院音楽隊の発展とその影響を考察した。この音楽隊は中国近代初の、全員が中国人による西洋管弦楽団で、「子どもによる音楽隊」のイ

メージを、全国ツアーによって定着させたという。この音楽隊の発展状況から、新式学校・児童音楽教育への影響を明らかにし、曾の音楽活動の実態・連続性を捉え直した。本研究により、曾の音楽思想と実践を通じて、中国の音楽及び慈善事業の発展に果たした重要な役割を示すことができた。このような発展の過程に日本がもたらした影響も疑う余地がない。また、上海貧児院とその音楽隊は、日中の児童音楽教育上の交流の切り口となるという意味で、今後も解明すべき重要な課題であることを指摘し、本論文の結びとした。

3. 山田耕筰の初期歌曲作品について

——プロソディ解析から見える楽曲構造の変遷——

服部 葉子（東京藝術大学大学院）

【発表要旨】

本論文は 1910～1920 年の間に作曲された初期歌曲作品に見られる楽曲構造の変遷から、山田耕筰が確立した日本語の詩による芸術歌曲の創作手法を明らかにすることを目的とする。主な論点は、(1)山田耕筰の初期歌曲作品(1910-20)における作曲手法の変化、(2)日本語の詩による芸術歌曲の作曲手法を確立した時期の解明、の2点である。本発表は論点(2)を中心とし、論点(1)のために取り上げた2つの歌曲集《山田歌謡曲集 露風之巻》(1910-16)と《風に寄せてうたへる春のうた》(1920)の間に作曲された《澄月集》(1917)《幽韻》(1919)と、山田耕筰が表した作曲指南書『簡易作曲法』(1918)を取り上げる。

本研究におけるプロソディとは言語コミュニケーションにおいて発話時に現れるポーズ(間)、リズム、イントネーション、アクセント、およびこれらの相互作用によって生成されるフォーカスなど、言語音声の機能的な部分を指す。これらは話し手の発話意図や感情などを聞き手に伝える言語の情報伝達機能に関するものであり、本研究のプロソディ解析は史料分析や楽曲分析を検証し補強するための理論的枠組みである。

本論文では、まず対象作品に関する山田耕筰の言説、この期間の活動を通して音楽で受けた影響などを調査し、次にピアノパートを含む楽曲分析と対象楽曲のプロソディ構造の分析を施行した。そしてデータ解析の結果から作風の変化を考察し、楽曲構造の変遷を解明するという手法をとった。

山田耕筰は言説の中で日本語のアクセントに対する強い拘りを述べている。先行研究では歌唱旋律と言葉のアクセントの一致率の検証もなされており、山田耕筰は1923年ごろまでには歌曲の作曲手法を確立していたとされている。しかし言葉のアクセントに関する言説の中で、日本語の「アクセント」を最もよく表現する言葉は「抑揚」であろうとも述べ、言葉の勢いや語調にも着目している。また『簡易作曲法』では言葉のアクセント及びリズムの詳細な分析を提示しながらも、詩の韻律を見出すことにより旋律は自ずから生まれ出るという旨を述べている。従って山田耕筰が目指した日本語の詩による歌曲とは、歌唱旋律に言葉の抑揚を再現することであったと考えられる。

「抑揚」とは言葉の音高変化、強弱、速度など、言語音声のあらゆる構成要素を包括したものであることから、本研究は山田耕筰の言説における「抑揚」は詩の文レベルに現れる文プロソディに相当すると仮定し、歌唱旋律のプロソディ分析を施行した。そのデータ解析の結果、1910～13年の作品では歌唱旋律と詩の文プロソディの関係性が希薄であったのに対し、1916年以降の作品では両者の同調性が有意に高まった。これは、詩の文レベルのプロソディを歌唱旋律に写し取るという手法を見出したことによる変化であると考えられる。この検証結果は言説とも一致する結果であることから、山田耕筰が歌曲の作曲手法を確立したのは、従来の考えられてきたよりも5年～10年早いことが明らかになった。

4. 戦後日本の吹奏楽文化

——吹奏楽と学校教育の関係性は如何に形成されたか——

都賀 城太郎

【発表要旨】

(1) 研究目的

戦後日本の吹奏楽について、学校の中に根付いた過程、世界的にも高い技術を持つようになったにも関わらず、社会全体にさほど普及しなかった理由、音楽及び周辺産業の思惑や戦略はどのようであったかなど、未だ検証されていない問題が多い。加えて近年においては、教員の職務再考の中で、課外活動の意味自体が問われるようになったが、新たな方向性についても十分に議論されてはいない。また、日本のスクールバンドでは全国大会に繋がるコンクールがあり、そこに如何に勝ち残るかが、活動のモチベーションともなっている。こうした中であって「戦う音楽」としての側面を持つ日本の吹奏楽は、自らが閉塞感を創り出してきたと言えなくもない。これらの多くの問題点について戦後日本の吹奏楽を俯瞰し、今後の方向性を見出すことが本論の目的である。

(2) 本論文の概要

戦前におけるスクールバンドの位置づけ、戦後の学習指導要領における器楽教育と吹奏楽の関係、課外活動としての位置づけ、学校における役割及び戦前との違いについて、公文書、著述などから考察を行った。また、客観的な根拠として戦後の吹奏楽雑誌の全記事内容を分類し、特定記事の比率を求めることによって、読者が求めていた内容、あるいは不足していた観点、更に全国規模で開催された学校吹奏楽協議会におけるプログラムや協議内容などを分析することによって、当時の吹奏楽指導者やバンドが抱えていた問題点を割り出し現在への系譜を辿った。更に加えて楽器業界と学校との関係を明らかにすることにより、なぜ吹奏楽が学校を中心とした音楽になっていったのかを明らかにすることができた。

(3) まとめと結論

上記の考察によって、スクールバンドは課外活動の一環として位置付けられたが、その指導法は当初、精神性やスパルタ式指導への依存度が高いことが多く、合理的、科学的指導が

立ち遅れる結果となった。加えてスクールバンドの活動については、吹奏楽を通じた「道徳教育」、「社会性の教育」であったり、学校行事に対する「実用音楽」の提供であったりと、音楽教育という観点が見薄になり、感性を育てるという点には結びつきにくかった。本来そうした方向に向かわせる上で非常に大きな影響力を持つのは吹奏楽コンクールであると考えられるが、勝利至上主義、学校や指導者の名誉の維持といった偏った方向に進んでいった結果、吹奏楽は音楽ジャンルの中でガラパゴス化していった。それは日本の音楽文化の特徴でもあったが、少子化が進む中で、大きく学校に依存していた吹奏楽は今後衰退することが予見される。その中で現在までのノウハウの維持だけでなく、新たな形態、新たな音楽表現を試みると共に、地域社会とつながり、一般聴衆を増やす努力が必要であると考えられる。

5. デジタル楽譜のコモンズ化 集合知が導く楽譜文化とその構造

関 慎太郎（東京大学大学院）

【発表要旨】

本研究は著作権および版権の切れたクラシック音楽の楽譜を機械可読な形式で収集するデジタル楽譜コモンズの構築プロセスを知識コモンズ研究の枠組みから検討したものである。楽譜が機械可読、すなわちコンピュータが自動的に読み込んで処理できるデータ形式として蓄積されることで、コンピュータ支援による新しい音楽研究の道が開かれることが期待されている。そのようなコンピュータ支援による新しい楽譜利用の基盤となるのが機械可読な楽譜の生成プロセスである。

コモンズにおける財の資源化はコモンズ財から資源として利活用可能なまとまりを持った資源ユニットを切り出すフロー化のプロセスとして捉えられる。コモンズに関わるアクターが個人の利益を最大化しようとする、コモンズの荒廃が引き起こされ、結果として集団全体にとっての用益が減少する「コモンズの悲劇」はよく知られた現象だが、知識のような競合性と排除性の両方が低い財に対して同様のモデルを適用することはできない。そこで、本研究では知識コモンズを単能的な小規模コモンズが相互につながったネットワークとして捉えることを提案した。デジタル楽譜コモンズの構築を支える主要な要素として、デジタル翻刻の対象となる楽譜画像アーカイブの構築、デジタル楽譜翻刻ツールを提供する技術開発、そして実際に楽譜の翻刻プロセスにかかわるコミュニティ形成の3つに注目し、知識コモンズをネットワークとして捉えることの有効性を検討した。

デジタル楽譜コモンズのネットワーク上では様々な財を提供するコモンズが互いのストックから資源ユニットを切り出すことで知識のフロー化をもたらしている。本論文が議論の中心に据えた機械可読なデジタル楽譜を軸にこのネットワークを観察すると、楽譜画像アーカイブや楽譜制作ソフトウェアによってもたらされた財が機械可読なデジタル楽譜の生成に向けて一方向的に切り出されているかのように見えるが、実際には資源ユニットを

切り出したコモンズが即時的用益を得る一方で、資源を切り出されたコモンズも様々な不可視的用益を得ている。これは、インターネット上で展開されてきたオープンソース・ソフトウェア開発と非常によく似た構造であり、デジタル楽譜コモンズの形成プロセスがインターネットにおける一種の文化構造を柔軟に取り込みながら資源の形成に成功している実態が明らかになった。

インターネット上で展開されてきた知的コンテンツの生成プロセスを取り込んだことで、デジタル楽譜コモンズにはその内部で常に資源を循環させながら新しい知識を生み出す可能性がもたらされている。これはデジタル楽譜コモンズが楽譜アーカイブサービスや楽譜フォーマット、楽譜ソフトウェアなどの多様なコモンズとそれを支えるコミュニティと密接につながっているからこそ実現可能な知識循環型コモンズネットワークにおける新たな知的資源生成のあり方だと言える。